

---

## 妖幻抄 9章

維月十夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖幻抄 9章

### 【Nコード】

N1014A

### 【作者名】

維月十夜

### 【あらすじ】

不調を訴えていた明が、ついに倒れた！瀕死の明を抱え、氷雨は、茫然とすることしかできなかった。

## 拒絶（前書き）

どうも、維月です。

とうとう、明、倒れます。

最近、書いてて、キャラが壊れ始めてきたような気が…  
氷雨とか、何かへタレてきましたよ（汗）

## 拒絶

月光の許、静かに風ぐ、夜の海の上空を、三人を乗せたヨミは翔ぶ。内海なので、対岸までの距離は短い。

「じいさん、どの辺にあるんだ？その村」

氷雨は、魂の方を振り返って尋ねた。

「ここからはまだ見えぬが、やがて谷が見えてくる、そこに儂らの村があるんじゃないよ」

「ふうん…て、ここらの地理は、あんまし知らねえんだよね」  
そう言うと、氷雨は首をすくめて見せる。

魂は、人好きのする笑みを浮かべると、静かに話し始めた。

「氷雨は、どこから来たんだ？」

「東崙とうろんの、栖庄せいしょうって村だけど…」

「この大陸が、棠とう・禹州うしゅう・蘇そ・栖す・崙ろん・東崙とうろん・胡この7つからできておるのは、分かるな？今、丁度影の海を越えた。今いるのは、棠と禹州の国境だ」

影の海とは、昼間は広大な平野として現れ、陽が沈んで、夜になると現れるというものだ。

「ってことは、俺の村が南東だから、西に、向かってたことになるんだな？」

「そういうことに、なるかな？」

天災により、国土は裂けて陥没し、7つの大陸を残してほかは、沈没への過渡を辿った。

「明？なんだ…寝ちまったのか」

氷雨は、明の方に向きなおって、声をかけた。

しかし、俯いたまま動かない明は、寝てはいなかった。

絶え間なく、襲いくる激痛に歯を食いしばり、意識を保のに必死だった。

気が、遠くなる。

一体、どうしてしまったというのだ。

これが、風邪の痛みとは、到底考えられない。

ならば、なんだというのだ！

この痛みは…

もう、目も、耳も使い物にはならない。

身体の中で、火でも燃えているようだ。

苦しい。

耳鳴りが、止まらない。

頭が、割れる。

今にも、体の内側から、壊れてしまいそうな気がする。

気づいてくれ、氷雨…

そのまま、素通りしないで！？

「よっぽど疲れてたんだな、まだ着かねえみたいだし、ゆっくり休め」

温もりが、頭を撫でる、氷雨の手が離れていく。

ち…がう！

違う！

体が、冷たくなっていく…

鉛みたいに、重くなっていくのが分かる。

「ん、見えてきたな…あの谷だ」

魂が指をさした先に、深くえぐれた、谷が現れた。

篝火でも、焚いているのだろう。

谷は、ほのかに明るかった。

「ヨミ、あそこに村が見えるだろ？下りてくれるか？」

氷雨が言くと、ヨミは一つ吼えて、ゆっくりと降下していった。

「明、起きろよ…じいさんの村に着いたぜ？」

揺り起こされて、明はゆっくりと顔を上げる。

急に降りたった烏兔に、驚いた門番の少年は、烏兔だ、と叫びなが

ら、一目散に村に走っていつてしまった。

「まったく、誰じゃ…<sup>きつ</sup>咬なんぞを立たせおつて」

全員が下りると、ヨミはいつものように小型化する。

少年が、逃げていった方を見て、氷雨は顎をしゃくった。

「あいつ、戻ってきたぜ？衛兵のおまけつきで」

言うよりも早く、あつという間に、氷雨たちの周りを、武装した男達を取り囲んだ。

「動くな！」

「な、なんだよっ」

余りの剣幕に、一步あとじさり、たじろぐ氷雨。

「同族のようだが、この村に何用か！？」

男達の中でも、ひととき大柄な男が言った。

「なっ、何用って…ただ、ヒトを送ってきただけだよ」

「ヒトだと？誰だっ」

目の前にいる男は、自分と大して年も変わらないように見える。

そう思うと、氷雨は面白くなかった。

ちらり、と明の方を見る。

彼女も、この待遇に驚いたのか、固まっているようだ。

「まったく、そこにいる、じいさんだよ」

氷雨が顎をしゃくると、男は、氷雨を押しつけて、瑰の前に出た。

「族長！？今までどこにつ、散々搜したんですよっ？」

「はあ…<sup>らいふ</sup>雷宇よ、仕事熱心なのはよいが、口を慎むことだ。この方々は、儂の客分にあたる」

「しっ、失礼を、申し訳ございません！」

雷宇、と呼ばれた男は、慌てて巨体を伏せ、謝罪し始めた。

その様子に、氷雨は面食らった。

「よい…顔を上げなさい雷宇、お前には、この方々の世話役を任せ  
る。よいな？」

「は！かしこまりましたっ」

明は、足元さえ定まらず、息をすることも、ままならない状態だった。

背中を、いやな汗が伝っていく。

喉が、灼けるようだ。

声が、でない。

氷雨が、なにか話しかけている。

けど、もう聞こえないんだ…

目の前が、暗くなっていく。

氷雨の顔が、だんだんぼやけて…

あたし、死ぬのかな？

もう、なにも

分からないよ…

「明！？」

突然、崩れ落ちた明を、氷雨は慌てて受け止めた。

明の瞳は虚ろで、焦点が、定まっていけない。

ああ、氷雨が…あたしを、呼んでくれた。

もう、これで、会えないのかな？

そんなの

やだな…

手、赤い。

あたし、血を吐いたんだな。

「明っ、しっかりしろ！聞こえるか、明！」

うつすらと開いた目はうつろで、もう何も、見えていないようだった。

呼びかけも空しく、明はゆっくりと、目を、閉じた。

彼女の頬を、一筋、涙が伝った。

「明？どうしたんだよ…冗談はよせ、な？起きろ、起きてくれ…起きろ明、明う！？」

氷雨は、力一杯、明を抱き締めた。

しかし、反応は返ってこない。

触れた手は、氷のように、冷たかった。

信じたくない、信じられない！

明が、死んだ…

「明、明っ…起きてくれっ、頼むからあ」

へたり、と座りこむ氷雨、震えが、止まらなかった。

「バカ！何してるっ」

雷宇は、慌てて明を取り上げると、顎を逸らして気道を確保した。

「まだ息がある、こらヒヨコ頭っ、しっかりしろよ！この娘はまだ生きてるんだ、今は移動が必要だっ、立て、早くしろ！」

雷宇は、明を肩に担ぎ、氷雨を引っ張りあげた。

「明が…生きてる？」

虚ろだった氷雨の瞳に、光が戻る。

「そうだ、これから薬師の所に連れて行く、ついてこい！」

走り出した雷宇の跡を追って、氷雨は走り出した。



薬師の娘・倩菜（せんな）（前書き）

こんにちは、維月十夜です。 <br>読者さま方、ここまで、ご苦  
労様です。 <br>倒れた明は、助かるのでしょうか？ <br>乞  
うご期待ください（^^）

## 薬師の娘・倩菜（せんな）

「倩菜、<sup>せんな</sup>いるかつ、俺だ、開けてくれ！病人がいる」

石造りの家並みを、いくつも通りすぎ、同じような造りの家の前に、雷雨と氷雨はいた。

「はいはいっ、そんなに叩かないでよ雷宇、ドアが壊れちゃうわ？」  
「急に血を吐いて倒れたんだ、族長の客らしいんだが、診てやってくれないか」

扉を開けたのは、赤い髪を一つに結った少女だった。

「中に入って、その子を、そのベッドに寝かせてくれる？」

「わ、分かった！」

少女が、指をさした先には、鉄格子のついた、台のような物があった。

おそらく、ベッドというのは、あれを意味するらしい。

「この子、同族みたいだけど…血を吐いたって言ってたわね、なにかな…持病でもあるのかしら？」

「さあ、どうなんだ？ヒヨコ頭」

「病気は持つてねえ…けど、寝不足とは、言ってた」

「寝不足で、血を吐くわけではない。どうしようね…」

「倩菜、この子、なにか言ってるぞっ！」

雷宇が、明を指さして叫ぶ。

「え！？」

薬棚をあさっていた倩菜は、慌てて明の傍に戻った。

「ここは、どこ、なんだ？」

「大丈夫、じゃないわね、あなた、どこが苦しいか分かる？」

「明っ！」

「待って！ちょっと黙って、あなたは、雷宇と向こうに行っててちようだい」

身を乗り出した氷雨の背中を、倩菜は押しながら言った。

「分から…な」

苦痛に、顔を歪める明。

明の瞳を診た倩菜は、事態の重大さに、息をのんだ。

「ひつ、ひどい！この子つ、『拒絶』を起こしてる！？どうして、もつと早く気づかなかったのよ！」

倩菜は、氷雨に怒鳴りつけた。

「な、なんだ？その、拒絶って」

氷雨は、おずおずと、倩菜に尋ねる。

「この子、目の色が薄れてるつ、これがどういことか、分かるわよね？妖の目の色が消えるのは、死ぬときだけ。この子の目の色が、かるうじて残っているのは、この子が、それを拒絶しているから。」

このままだと、死んじゃうのよつ、分かっているの！？」

「じゃ、じゃあ…どうすんだよ」

「この子の体に、拒絶を起こす、なにかが取り込まれた…とりあえず血を与えて、鎮静させなくちゃ」

氷雨は血と聞いて、長らく忘れていた、出立の夜のことを思い出した。

そうだ。

自分の母親は、明に、血を与えていなかったか。

「そうだ、血だ！旅に出る前の晩、俺のお袋が、明に血を飲ませてた」

「体液の不適合ね、分かったわ…それなら話は早い」

倩菜は、卓に置いてあった小刀で、手首を切った。

「雷宇、明さんの首の下に枕を置いて、口を開かせて？」

「お、おうっ」

明の口の中に、いくつか、赤い雫が落とされた。

「これで、拒絶は治ると思うわ、よかったわね？ヒヨコ頭くん」

「なっ、ヒヨコ頭じゃねえ、氷雨だ！」

元のペースを取り戻した氷雨は、反撃することも、忘れてはいなかった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1014a/>

---

妖幻抄 9章

2011年1月13日03時00分発行